

不登校の基本的な性質とその対応について

原 英樹

1. はじめに

不登校の児童生徒数は、平成20年度の文部科学省の学校基本調査では12万7千人を記録しており（文部科学省，2009），不登校は依然として主要な教育的、心理的問題の一つであると言えよう。

不登校は、対人関係の構築や社会参加の実現などに必要な技能や能力を養う機会を喪失させるなど、深刻な事態を引き起こす可能性があるとされている（文部科学省，2003）。この問題がもたらす様々な影響を考えると、教育界、ひいては、社会全体で、この問題への理解を深め、適切な対応や介入のあり方を検討していくことが必要となろう（文部科学省，2003）。

そこで、本論文では、不登校の基本的な性質とその対応上の問題点について、以下に論じていく。

2. 不登校の用語と定義

さて、不登校の定義や用語のあり方については、長らく、様々な議論がなされてきたが、必ずしも統一した見解が得られていない（稲村，1989）。

最初に学校に登校出来ない児童生徒を取り上げたのは、ジョンソンら（Johnson et al., 1941）である。彼らは、怠学的児童生徒と神経症的症状の児童生徒を区別し、後者を学校恐怖症（school phobia）と命名した（稲村，

1989）。しかし、その後、不登校状態を学校に対する恐れや不安と規定することに異論が述べられ、親子関係や児童生徒の発達などの様々な要因により発生した異なる性質の不登校の存在を考慮して、登校拒否という用語が用いられるようになった（稲村，1989；坂野，1990）。

近年、臨床的な研究により、不登校現象は、多様な成因によって生じる種々の症状から構成される症候群であることが明らかになった（Kolvin et al., 1985）。実際、文部科学省の不登校の分類によると、不登校の様態は、心身の不調や強い不安により登校できない“不安など情緒の混乱型”，他の生徒や教師との関係など学校生活の問題から登校しない“学校生活に起因する型”，遊びや非行行動により登校しない“あそび・非行型”，無気力感や不登校状態に対する罪悪感の欠如から登校しない“無気力型”，何らかの信念や考えにより積極的に登校しない“意図的な拒否型”，これらの“複合型”など、多様な特質を示すことが明らかになっている（文部科学省，2003）。

近年、このような多面性を鑑みて不登校を規定しようとする傾向が強まりつつあり（坂野，1990），不登校を、何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは、社会的要因・背景により登校しない、あるいはしたくともできない状況と規定し、不登校現象を幅広く捉えようとする定義が示されるようになった（文部科学省，1999）。稲村（1989）は、様々な不登校状態を、包括的に不登校と呼び、他方、その性質や内容

を、細かく分析、検討していくことが望ましいと論じている。

3. 不登校の要因

既に論じたように、不登校には、様々な成因やきっかけにより生じると考えられているが (Kolvin et al., 1985; 坂野, 1990), ここでは、主に3つ要因から、不登校の形成や発生を検討することにする。

(1) 不登校の家庭的要因

まず、不登校の家庭的要因については、母子関係を重視した立場から、母子分離不安説が展開されており、子供が母親から引き離される際に感じる強い不安によって、登校が阻害されると論じられている (Johnson, 1957)。

不登校児の親の性格を見ると、母親は過敏で心配性、父親は完全主義で几帳面な親が最も多いという傾向が明らかにされており (稲村, 1988), さらに、母親の不安の強さや父親の自信の欠如などの傾向も指摘されている (鏑, 1963)。

稲村 (1988) の臨床的調査によれば、不登校児の親の養育態度に関しては、母親側に、極端な偏りが見られ、過干渉と過保護・溺愛の2つのタイプが半数以上を占めている。一方、父親は、放任・逃避が最も多く、過保護・溺愛、厳格、甘やかしの順となっている。その他の研究においても、母親の過保護や過干渉、父親の放任などが多く指摘されるなど、似たような傾向が示されている (星野ら, 1985)。上記のような家庭的な特性、中でも、母親の要因に着目すると、子供と依存関係にある母親との間で、不登校が発生し易いことが示されているといえよう。

(2) 不登校の学校関連の要因

次に、学校の要因に関しては、学校恐怖症 (school phobia) という用語に象徴されると

おり、不登校は、学校やそれに関連するものに対する恐れや不安によるものとする意見が、古くから主張されている (稲村, 1989)。

具体的には、学校に関連する要因として、以下のような報告がなされている。まず、不登校経験者自身の報告によると、不登校の発症契機は、友人関係のトラブルが最も多く、学業の不振、教師との関係などが続いている (文部科学省, 2003)。

また、鹿児島大学の心療内科の受診者を対象とした調査では、入学・新学期・転向による環境変化、成績の低下、友人や教師とのトラブルなどが頻度の多い発症契機としてあげられている (野添・古賀, 1990)。

学校の進学率と関連では、進学のランクが比較的高い学校から、不登校が多く発生している。さらに、不登校のタイプに着目していくと、進学のランクの高い学校から、神経症タイプが、進学のランクの低い学校から、怠学タイプが発生し易いことが明らかになる (稲村, 1988)。

上記の研究結果からは、学校に関連する様々な要素が、不登校の発症に関わっていることが示されているといえよう。

(3) 不登校の社会的要因

さて、社会的な要因に関しては、高木 (1984) は、高度成長期以降の不登校の増加は、伝統的な家長的家族制度が、都市化、工業化という社会構造の変化によって決壊したことによるものだとしており、とりわけ、子供たちが社会化していく際のモデルとなる父親の役割や存在感の希薄化により、学校などにおける不適応が生じていると述べている。

様々な社会的指標との関連性に関しては、桜井 (1988) の調査によって、住宅地価の高さ、所得の高さ、人口密度の高さ、一校あたりの生徒数の多さなど、都市部に顕著な要因が、中学校での不登校の増加と関連性を持つことが明らかになっている。

前述のように、不登校を解決していくためには、教育界及び社会全体として、この問題を理解し、効果的な対応を見出していくことが求められているのであり（文部科学省、2003）、不登校の因果関係やメカニズムをより明確に解明するためには、今後も地域や社会に関わる多面的な観点から、不登校の発生や形成について、更なる研究を進めていくことが必要となろう。

4. 不登校児に対応する際の留意点

ここでは、筆者が関わった教育や教育相談の現場の事例から、神経症的な不登校児に関して、その対応上問題になり易いと思われる、いくつかの重要な観点について、以下に述べていく。

(1) 登校刺激のあり方

さて、不登校児に向けた学校側の対応として、学級担任による不登校児の家庭訪問、不登校児の近況などについての学級通信への掲載、朝の登校時間に不登校児を迎えに行くこと、クラスメートの不登校児の訪問への呼びかけ、学級通信や学校関連書類の手渡しなど、不登校児を学級に誘おうとする様々な登校刺激の与え方が考えられる。

上記のような登校刺激の与え方については、学級担任が、どのような形の刺激を、どのような頻度で、どのような状況で与えるかが重要である。しかし、その対象が学校に登校しない児童生徒であるため、その児童生徒の普段の行動や様子が分かり難く、学級担任が、どのようにして登校刺激を与えるべきか、その判断に悩むことも珍しくない。

前述のような問題に対しては、不登校児が、与えられる登校刺激をどのように受けとめているかを理解することが重要となる。具体的には、当人が登校刺激を「気を遣ってくれているので、どんなに苦しくても学校に行かなければならない」などと、心理的な負担やプレッシャーと感

じるのか、あるいは、それを「学校に行っていないのに、気を遣ってくれてうれしい」と励みに感じるのか、当該児の心情を理解することが何よりも大切なのである。

さて、ある事例では、熱心な学級担任が、毎朝、不登校児宅に児童を車で迎えに行き、強引に教室に連れて行くような形の登校刺激を与えた。しかし、一週間後には、その児童は部屋に閉じこもり、その担任に二度と会おうとしなくなってしまった。このケースでは、担任が、不登校児の心理的負担を考慮せずに、登校させようと結果を急ぎすぎたあまり、その児童との関係をも損ねてしまったと言えよう。その担任が不登校児の心理的な負担を十分に理解した上で、その熱心さを生かし異なる対応を行っていれば、当該児童をよい方向へ導いていける可能性があったと考えられただけに、とても残念な結末であった。

さて、学級担任は、通常、放課後の、夕方、あるいは、夜などに不登校児の家庭訪問を行うことが多いが、そのような時間帯には、不登校児は比較的元気であることが多い。ある事例では、担任が、上記の時間の不登校児の様子を一瞥しただけで「もう大丈夫だよな。明日から元気に登校しろよ、明日は教室で待ってるからな」と当該児童から登校の約束を強引に取り付けようとしたことがあった。そして、このように不登校児の心情への理解を欠いた登校刺激は、その後も、不登校児の反応を確かめることなく続けられていった。結果的に、このケースでも、当該児童はその後も登校することなく、一方的に約束を取り付けようとする担任との関係は次第に疎遠になっていった。

このケースでは、担任教員が、学校に行かなければならないという圧力から解放された夕刻以降の不登校児の様子のみをもって、当該児童が元気であると即断し、強引な約束へと持って行ったのである。

しかし、多くの場合、不登校児の心理的なプレッシャーは、登校しなければならない朝の時

間帯から昼の時間帯まで、極めて高い状態になり、その後、昼過ぎから少しずつ低下し、3時過ぎの放課後の時間帯には、通常のレベルに低下していくのである。

従って、上記の担任は、時には腹痛、頭痛などの身体症状をも伴う程の苦悶の状態を知らずに、その児童を元気であると誤解したと言えよう。このような誤解の中で進められた登校刺激の試みは、その後も、当該児童がそれをどう感じているかなど、その心情面への配慮が全くないまま続けられ、ほとんど効果がなく終わったのである。

前記の2つのケースの経緯を考えると、「何とか学校に行かせたい」という教員の思いばかりが先走り、不登校児が与えられた登校刺激をどう感じているかという視点が欠落していて、不登校児の心情の理解という重要な側面がなおざりにされていることが対応上の最大の問題であろう。

既に述べたように、普段学校で接触することのない不登校児について、少ない情報を基に、彼らの行動や心情を把握するのは極めて難しいと言えよう。従って、不登校児の心情の理解を進めていくには、常に家庭などと緊密な連携を取り、多様な側面から情報を得ることが大切であり、それらを基に、与えた登校刺激が、当人にどのように受け取られ、また、どのような影響をもたらしているのか、慎重に検討していくことが必要となろう。

(2) 不登校児の自責的な心理への理解

前項でも述べたように、不登校児への対応において最も重要なことは、彼らの心理に対する理解である。

一般的に、神経症的な不登校児は、非行や怠学の児童生徒とは異なり、「学校に行きたい」と思いながらも、何らかの原因により「行けない」ことが多いのである。つまり、彼らは、“サボッテイル”訳ではなく、常に学校に行かなければならないという強い使命感を持ちながら、

行けない自分と戦っている状態にあると言えるのである。

実際、多くの不登校児は、他の児童生徒が学校にいる時間帯に外出することなどに強い抵抗感を示し、また、登校していない自分に対しては罪悪感を持っていることが多い。そのため、学校の活動時間に、どうしても外出しなければならない際には、必死に人目を避けようとするのである。また、不登校児が抱く上記のような罪悪感の意識は、「みんなが行っている学校にさえ行けない自分」などと自らに対する否定的評価につながることも多い。

他方、不登校児の親たちは、我が子を何とかして、登校させないと、今後の進学や就職を始め、その将来にも深刻な影響を及ぼしかねないとの危惧を抱いている傾向が強い。そのため、中には、親が、不登校状態にある我が子に対して、「せめて勉強が出来なくても、運動が得意でなくてもよい。せめて、みんなが出来る学校に通うことぐらいして欲しい」と言い続けたケースもあった。しかし、このようなメッセージは、我が子に対する必死の思いの表明には違いないのだが、そのメッセージを受け続けた不登校児は、「みんなが通える学校さえ、行けない自分」という自己否定的な評価を積み重ね、自らの問題に挑んでいく自信をも失っていく危険性をはらんでいるのである。

従って、不登校児が、常に学校に行かなければならないという強い使命感を持ちながら、行けない自分と戦っていることや、とりわけ、彼らが自責的な感情を持ち易いことなどを理解し、不登校児を必要以上に追い詰めることがないよう、その対応を慎重に進めていくことが求められると言えよう。

(3) 不登校児に対し肯定的感情を表明することの重要性

既に述べたように、親は、不登校児が学校に通っていないことによって学習や社会的活動などで遅れを生じ、それが進学や就職などに大き

な障害となることを不安視する傾向が強い。そのため、親は、どうしても「勉強をなさい」など、“～しなさい”という形で、自らが懸念している事柄について指示や命令を与えることが多くなる。しかし、毎日のように指示や命令を受け続ける児童は、次第に、親の発言を疎ましいと感じることが多くなるため、両者の関係はこじれ易くなり、その結果、不登校児を支え、基盤となりうる親子関係そのものが揺らぎかねなくなるのである。

上記のような状況で、関係を悪化させずに、不登校児を支えていくためには、親がどのような思いから、「勉強をなさい」と述べているのかしっかりと伝えること、すなわち、上記発言の前提となる「社会で活躍できるようになって欲しいから」、「大切に思うから」という、親が心の奥に抱える真の肯定的感情を我が子に対して伝えていくことが大切になるのである。

日本では、伝統的な“腹芸”、“以心伝心”などの表現に象徴されるように、親しい間柄では、一般的に、心の奥に存在する感情をあからさまに表現することは少なく、互いに相手の感情を付度していくことが美德とされている。確かに、何も問題がなく平穏無事に過ごしていけるような状況では、真の感情を明確に表現しなくても、良好な関係が維持され易いであろうが、互いに問題を抱え、些細なことが誤解を生み易い状況では、自身の真の感情をしっかりと相手に伝えることが必要だと言えよう。

従って、不登校という重大な問題を抱えている状況では、親が、常に、我が子に対し肯定的な思いや感情を伝えていくことを心掛けていくことが必要であり、それにより、親が不登校児の良き理解者、支援者であることを確信させ、彼らが、安心して不登校という問題に挑めるようにしていくことが、最も重要な課題となるのではないか。

5. おわりに

不登校は、依然として深刻な教育、心理的問題である。未だに、不登校者数が十万人を大きく超える状態が続いている状況を考えると、不登校が発生する要因を正確に把握し、それを基に、効果的な対応や介入の方法を開発していくことが我々一人一人の急務であると言えよう。

文献

- 星野仁彦・新国茂・金子元久・遠藤正俊・八島祐子・熊代永 1985 登校拒否の発症に関与する家族・社会的要因 福島医学雑誌 35, 413-423.
- 稲村博 1988 登校拒否の克服 新曜社
- 稲村博 1989 不登校の研究 新曜社
- Johnson, A. M., Falstein, E. I., Szurek, S. A., & Svedsen, M. 1941 School phobia. American Journal of Orthopsychiatry, 11, 702-711.
- Johnson, A. M. 1957 School phobia: Workshop, 1955, 3 Discussion. American Journal of Orthopsychiatry, 28, 307-309.
- Kolvin, I., Berney, T. P., & Bhate, S. R. 1984 Classification and diagnosis of depression in School phobia. British Journal of Psychiatry 145, 347-357.
- 文部科学省 2009 平成21年度学校基本調査速報調査の概要
- 文部科学省 2003 今後の不登校への対応の在り方について
- 野添新一・古賀靖之 1990 登校拒否・不登校の病理 坂野雄二(編)登校拒否・不登校 同朋舎出版 Pp.54-72.
- 坂野雄二 1990 登校拒否・不登校の理解 坂野雄二(編)登校拒否・不登校 同朋舎出版 Pp.2-36.
- 桜井油朗 1988 中学生長期欠席の急増に関わる社会・敬税的指標の時間的推移およ

び地域差による検討 小児保健研究47, 637-647.

高木隆郎 1984 登校拒否と現代社会
児童精神医学とその近接領域25,63-77.

鑪幹八郎 1963 学校恐怖症の研究(1)
一症状形成にかんする分析的考察— 児童精神医学とその近接領域4, 221-235.

内山喜久雄(監修) 1974 児童臨床心理学辞典 岩崎学術出版社